

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



「紙本著色 斯波兼頼像」山形市・遍照寺



「絹本著色 斯波兼頼像」(山形市指定有形文化財) 山形市・光明寺



「紙本著色 斯波兼頼像」山形市・光明寺

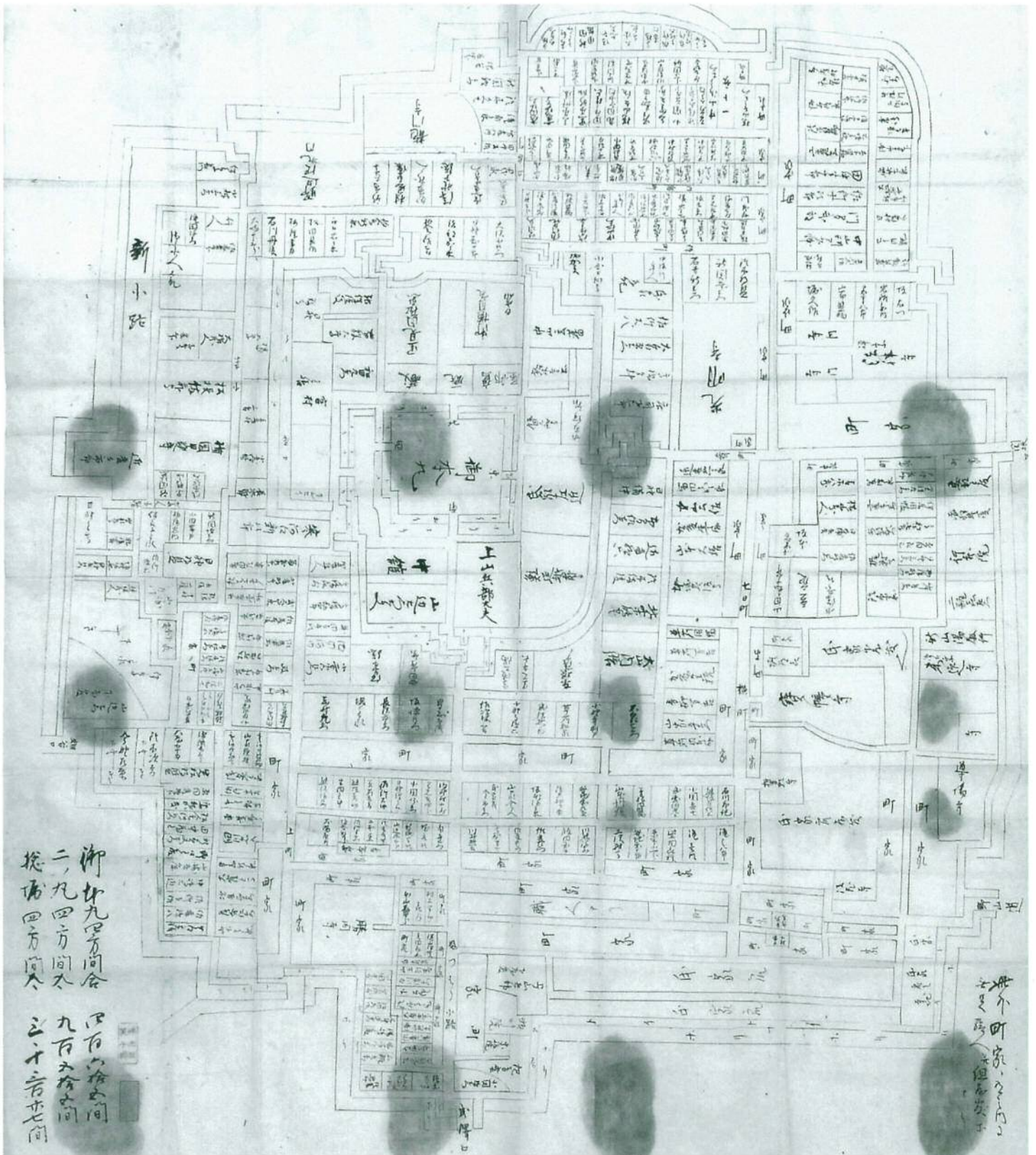
- ◆新出史料の山形城下絵図について
- ◆史料紹介 一花堂乗阿『最上下向道記』から考える
- ◆参加者の声 こども講座
- ◆研究余滴 名刀「東禅寺正宗」流転

山形城築城650年記念号

No.14
2007年3月発行



最上義光歴史館



假称 秋元本山形城絵図 縦101cm 横88cm 個人蔵

新出史料の山形城下絵図について

村山民俗学会事務局長

市村 幸夫

今年、斯波兼頼による山形城築城六百五十年にあたります。その折しも、今まで一般に知られていなかった山形城絵図が「新たに」現れました。仮に「秋元本山形城絵図」と名づけられたものです。

この図は、山形城及び山形城下町の成立をめぐる従来の考え方を、根底から見直させる内容を含んでおり、今後大いに研究される必要があるものです。このたび、同絵図の所蔵者から調査を委託された村山民俗学会事務局長市村幸夫氏にお願いし、第一次の考察と問題提起を掲載させていただきました。

山形城は延文二年（一三五七）斯波兼頼によつて築城が始められたといわれている。今年で六百五十年の節目を迎えている。その後最上義光による大規模な拡張と整備がなされたようで、それらの城下を描いたいくつかの城絵図が残されている。現存する山形城下絵図の中で最も古いといわれているのは、最上家が改易された際幕府の上使に差し出したとされる、山形県立図書館所蔵の「最上家在城諸家中町割図」（以下本稿では便宜的に「元和城絵図」とする）で、元和八年（一六二二）頃の山形城下を描いたものとされている。

ここに、素朴なタッチで彩色のない一枚の山形城絵図の写本がある。従前発表されている城絵図とは明らかに相

郭内

違し、随所にあらたな様相が認められる。縦一〇一センチ、横八八センチほどの小ぶりなもので、三の丸の範囲のみで従来の絵図にみられるような三の丸外の城下は書き込まれていない。また、題名、書写年代の記入はなく、欄外に「御本丸四方間合 四百六拾五間、二ノ丸四方間合 九百五拾五間、総堀四方間合 三千三百廿七間」「此外町家ト有之内ニ無足給人并組屋敷等アリ」と脚注がある。（旧秋元藩士の子孫A氏に伝わる絵図であることから、以下本稿では「秋元本山形城絵図」と仮称する）。

この一枚の城絵図から、最上義光が描いたであろう山形城下を読んでみたい。

既存の城絵図は、三の丸の出入り門は十一口を数え、吉の文字になぞらえ吉字の門といわれてきた。しかし、ここに紹介する絵図は十口の門であり、いわゆる「横町口」が記入されていない。また、出入り口には従前の絵図にみられる呼称は一切付されておらず、大手口には「関根口」、十日町口には「野山道」、吹張口には「成沢口」、飯塚口には「畑谷口」と書き込まれており、郭外への出口というよりも山形城下外への出口と言った表現である。鯨口ほかの出入り門に呼称は付されていない。

「横町口」は郭外に形成される銀町、桶町等の職人町への至近位置にあり、義光による大改造により必要とされ、後世に創設された出入り口で、十一口の吉字の門として喧伝されたのは、山形城下町が完成された時代のものであるかろうか。

本丸の総延長は八五〇メートル、二

の丸は一、七四〇メートル、三の丸は六、〇六〇メートルである。「元和城絵図」と比較するに、本丸は変わりが無いが、二の丸は二、三〇〇メートルで五六〇メートル、三の丸は六、五〇〇メートルで四四〇メートルほど広くなっている。山形城の堀は「元和城絵図」にみられるような改修が行われたとみるべきであろう。

二の丸

二の丸の内には、中館・サンセイ（「元和城絵図」では「西仙」とある）・御横目衆のほか、重臣の屋敷が配置されている。元和城絵図では布施野大学・和田九郎右衛門・神保四郎左衛門・里見蔵之進の屋敷のみで重臣の屋敷はない。一方紹介する城絵図には、山辺右衛門大夫・上山兵部大夫・氏家左近・鮭延越前守・里見内蔵丞・中山玄蕃といった重臣をはじめ、布施大学・日野数馬・神保隠岐・和田九左衛門・飯田

大和守・鈴木太兵衛・齋藤伊豫・宮村主膳など十四の屋敷がある。本丸の城主を守るように、重臣が配置されており、「元和城絵図」とは違った本丸防備策があらわれている。また北側には他絵図ではみられない「鷹部屋」とある一画がある。

三の丸

この城絵図の特徴的なものの一つに、二の丸堀の外側には間隔を入れず、びつしりと家臣の屋敷が配置されていることである。「元和城絵図」では二の丸堀外周に緑地帯らしき空間が四面に配置されている。現市街地であろう美術館や山形駅あたりが該当するであろう。家臣と町人が一体となったこの光景が義光の描いた山形の城づくりの原形であり、肥前名護屋への出兵以後、義光の城作りの考え方が大きく変わった証左ではなからうか。城絵図に表れた家臣団の屋敷数は三九二軒であり、郭外にも家臣の屋敷はあったかと思われるが三の丸の外側は書かれていない。

三の丸内に書かれている町名の数は少なく、「元和城絵図」にみられるような町軒数などの書き込みはない。上町、下条は現在の地名と所在が一致するが、肴町が現義光歴史館の南面に、

市日町として七日町が現豊烈神社前大通りに、横町が香澄町スズラン街の大通り（香澄町横町南）に書き込まれている。この南北に長い大通りは町場を形成していたようで、両側には「町家」が軒を並べている。また、三の丸の構築は南から北へ進められたと思われ、南側には町家が数多くみられるが、北側には立畠町、内畠町といった町名がみられ、以前は畠地だったのであろうか。北側には侍町の町名がみえる。また勝因寺の東に「職人アリ」と書かれた区画があり、三の丸内は武士・町人・職人・寺院が同居し、城下町として機能していたとみられなくもない。

寺社

最上義光は慶長五年（一六〇〇）の出羽合戦のあと大改造をなし、寺院と町人を三の丸外へ誘導したとされている。郭内での寺院立地を「元和城絵図」にみると、光明寺、行蔵院、宝幢寺、来畔坊（院）、二王堂（正樂寺）、勝因寺、新山（寺）などであるが、紹介する「秋元本山形城絵図」は、上記のほか法祥寺、龍門寺、来迎寺、誓願寺、宗福院、法花寺（浄光寺）、観音寺、六椏観音、行人（月山寺カ）、導場寺が三の丸内にみえる。また南東の隅には「氏家衆の寺地」なるものがある。神

仏の加護を求めた発想の配置であろうが、三の丸内に神社は書き込まれておらず、神社は全て郭外に置いたということであろうか。寺院の配置をみるに、元和八年頃のものと思われる「元和城絵図」とはあきらかに相違している。なかでも常念寺が勝因寺の北側に小さく書かれており、常念寺が山形に招致された当時のものと考えられる。しかし、疑問点がないでもない。慶長八年（一六〇三）義光嫡子修理大夫義康の菩提を弔った寺にしては屋敷が小さすぎる。また三の丸内に現在まで変わらず建っている寺院として各文献に紹介されている正樂寺（子の権現）がみえない。正樂寺を他の絵図では仁王堂として紹介している。なぜ書き込まれていないのか。

城絵図の成立年代に大きく関わるものとして、火災の記録が斯波兼頼の菩提寺光明寺につたわる「遍照山光明寺由来記」^⑧の後段にみえる。「元和三年三月八日山形寺社多ク焼失当山モ不残焼失」とある。「秋元本山形城絵図」には中世に造立された寺院が残っており、元和三年（一六一七）大火以前に成立しているものと判断される。

家臣

秋元藩時代に書写された「秋元本山

形城絵図」は、大改造されたのちに書写された他の城絵図とは、街路や家並みの違いにより比較検証できないが、気の付いた点を述べてみたい。まず、従来発表されている城絵図の解説には、三の丸の出入り門附近には義光の重臣を配置したとあるが、このたび紹介する「秋元本山形城絵図」で重臣が配置されているのは、下条口の野邊澤九内^⑨（野邊澤宮内・延澤遠江守）のみである。義光は当初穏やかな美しい城下町を描いていたのではなからうか。また「後室」と明記ある屋敷も存在しない。中山玄蕃（没年不詳）らが生存している時代の成立ということであろうか。

城絵図写本から家臣団の動向をみてみたい。「写本にみる屋敷割」^⑩に記載されている「元和城絵図」から二の丸内及び二の丸濠周辺の侍名を比較検証すると、一四四名のうち同じ名の家臣が「秋元本山形城絵図」全体に載っている数は五八名にすぎない。これは、世代交代や廃絶も考えられようが、寺院及び町家を郭外に移動させた際、大規模な屋敷替えが行われたことによるものなのかもしれない。このことは「元和城絵図」と「秋元本山形城絵図」との間に、時の流れが存在したことを感じさせるものがある。

新出の城絵図は、家臣の没年などから推敲した場合、解明を要する事柄や

問題点が浮き彫りになるであろうが、山形城大改造の諸相など、未解明であった部分に光をあてるべく、所蔵者A氏の了解をえて山形城下町を再現してみたものである。

義光の構想といわれている城下の大改造は、いつの時代であったものか。そして新出の城絵図はどのような時期を表しているのだろうか。ごく僅かな事柄の検証から城絵図の成立年代を推し量ることは容易でないが、私見として、郭内には慶長年間に郭外に移転したとされる寺院が残されていることから、推定年代の幅が広いことを承知しながら、この城絵図の成立年代は、上限は出羽合戦以後の慶長十年（一六〇五）頃から、下限は大火があったとされる元和三年（一六一七）以前のものと判断をしたい。

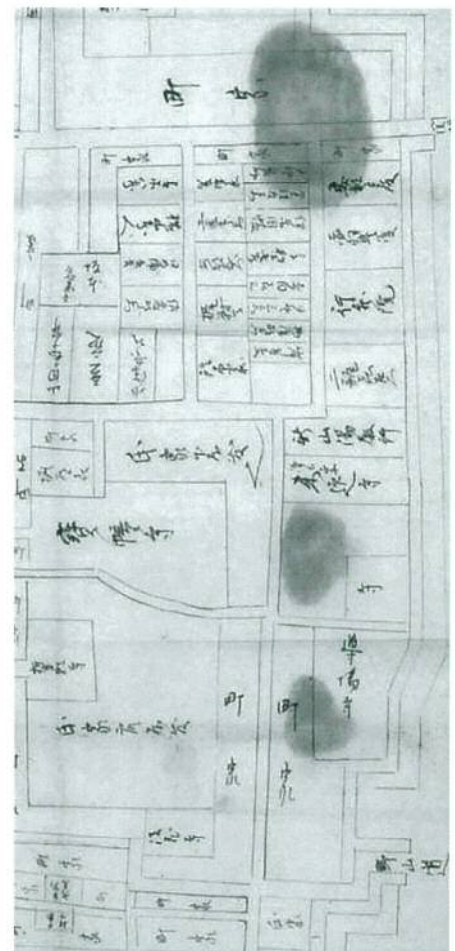
山形市在住の伊藤哲郎氏のご厚意により「秋元本山形城絵図」と同様な構図のものが、外にも存在することを示唆する古文書をご紹介いただいた。山形市船町の旧家、今野家所蔵のもので『最上家御系図』と表題があり次のように書かれている。「往昔義光公御在城之節之図、予所持するを見るに、今之図と八違有、むかし八横町口無之、亦今之本町通り御城内三有、寺院も多く有之、其外八御幕下城持衆之交代屋鋪、其外大身衆之屋鋪二而、平侍衆八今之町屋鋪侍屋鋪三而有しと見ゆる也、城

内別往還の通路三而、諸大名衆も其節は城内を御通り被成候と也、今之三之郭之外三大郭有しと也、南は松原、東小白河、出口北は長町邊二大門有之、大囲ひ有しと也」

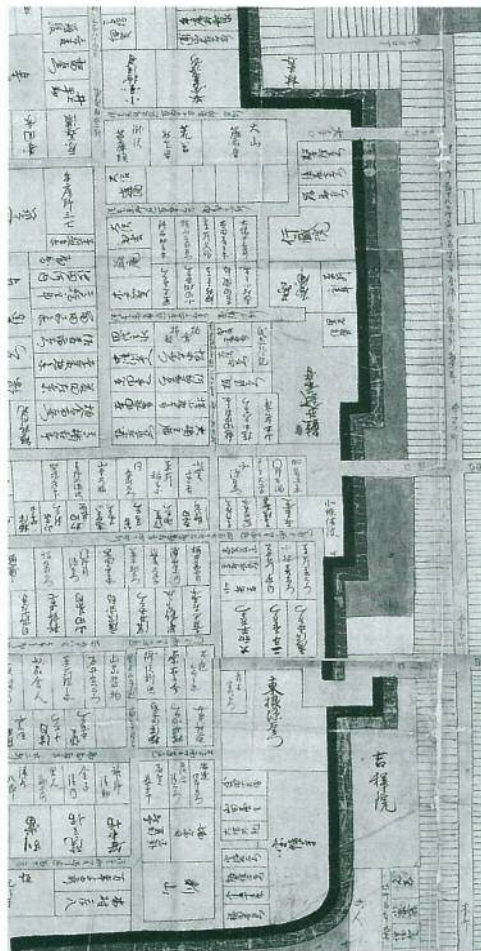
今野家が所持していたとされる絵図は未確認であるが、古文書の内容は、三の丸の出入り門は横町口が無く十口であること、寺院が数多くあり城内に町場があったことなど、「元和城絵図」とはあきらかに相違していることを、今野家の先祖は記している。今野家古文書の内容は「秋元本山形城絵図」にみられるものと同じ内容であり、ここに紹介する山形城絵図の原本がかつて存在し、写本として残されたものである事を立証しているといえよう。また、往還の街道が城内を通っていたという興味ある内容も記されている。山形城の歴史を考えるうえで貴重な資料といえよう。

「秋元本山形城絵図」は、従前紹介されてきた山形城絵図の概念を考え直す内容が記載されているのではなからうか。山形城の生い立ちに新たな考察が加えられれば幸いである。

この稿をおこすにあたり、城絵図所蔵者A氏、山市立図書館長片桐繁雄氏よりご教示をいただきました。あつく御礼を申し上げます。



〈仮称「秋元本」三の丸関根口（大手口）と野山道（十日町口）〉



〈県立図書館蔵本三の丸大手口と横町口と十日町口〉

〈註〉

- 1 平成十五年三月 最上義光歴史館より複製本が刊行されている
- 2 『山形開祖斯波兼頼公』訳注改定版 光明寺奉賛会 平成十七年十二月五日
- 3 『延沢軍記』『野辺沢城記』に、「幼名又五郎と云、のち宮内少輔康満と云、慶長八年遠江守光昌と号す」尾花沢市史編纂委員会 昭和六十年三月三十日
- 4 『山形城下絵図』高橋信敬 誌趣会 昭和四十九年二月六日

史料紹介

一花堂乗阿『最上下向道記』から考える

元最上義光歴史館事務局長
上山市立図書館長

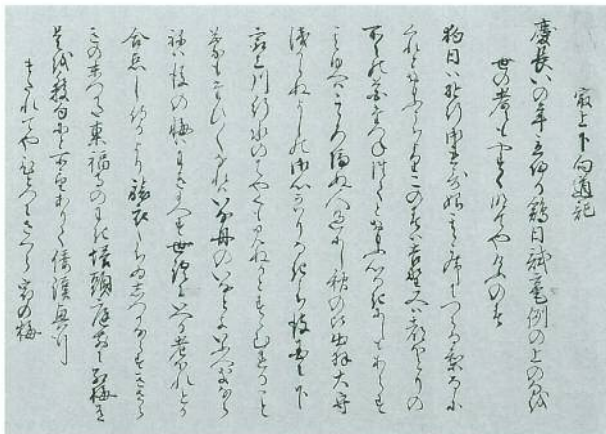
片桐 繁雄

山形市七日町の光明寺に、一花堂乗阿の『最上下向道記』が秘蔵されている。

乗阿は時宗の僧侶で、桃山〜江戸初期（一六〇〇年前後）に京都を中心に活躍し、『源氏物語』『古今和歌集』などの古典研究に寄与した学者である。歌人として、また連歌の指導者としても知られていた。貞門俳諧の祖松永貞徳は、その著『戴恩記』に乗阿との接触があったことを述べている。また、青年時代の林羅山と『源氏物語』をめぐる論争をしたこともあったという。このような著名な文人が山形を訪れて滞在し、最上一門や周辺の人々を指導した事実、山形の文化史を考察する上で重要な示唆を与えるものだ。

「光明寺由来記」によると、義光は在京中に乗阿から『源氏物語』を学び、切り紙（免許状）を伝授されたとされる。これが機縁となって義光の要請を受け、山形に来て光明寺十八世住職となった。小高敏郎博士の大著『近世初期文壇の研究』（昭和三十九／明治書院）では、乗阿が出羽に下ったときの

「道之記」について、「あるはずだが、目暗の機を得ない」と残念がっており、また、乗阿が後陽成上皇や智仁親王らとともに詠じた「御当座百首」一巻は、戦災に遭って失われたのではなにかとの懸念を述べておられる。ところがこの両作品が、ともに光明寺に蔵されていたのである。



以下、『最上下向道記』による。

七三歳の乗阿は、慶長八（一六〇三）年五月十二日（太陽暦六月二十一日）の昼に京都を発つ。道中さまざまな出来事を経ながら、越後本庄（村上市）を経て出羽に入る。

「羽州庄内、今あらため鶴岡というに到れば、御城の普請の奉行衆とて両三人、今行くべき先々の道のことまで沙汰せらる」……「亀ヶ崎」（酒田市）「鶴ヶ岡」（鶴岡）と佳名に改められたのは同年三月とされるから、乗阿は地名が変わって間もないころにここを通ったことになる。一泊して翌日は最上川の舟に乗り、ほどなく山形に着く。山形については、「造り並べたる家々数多く、柳・桜植えぬ門もなく、見る目輝くばかりなれば、覚えずしてまたもとの都のうちに帰り入るかと、聞きしにはまさりはべりぬ」と。称賛した。太守義光への儀礼的挨拶が加わっているととしても、この時代の山形は美しかった。最上五七万石、全国屈指の大名の城下である。義光自身が京文化への憧憬をいだき、山形にすぐれた文化を移入しようとしていた、まさにその時代である。乗阿の描写は、美しい山形を語って印象深い。

乗阿の山形滞在は足掛け三年という短い期間だったが、その間最上一門は光明寺において、しばしば彼の指導の

もとで連歌会を開催した（「由来記」）。東根城主里見一家が連歌に熱心だったのは、この影響があったと見てもよい。城下の士庶、僧俗が芸術・文化に開眼するきっかけとなった可能性もある。

江戸時代の早い時期に、旧最上家臣の一人斎藤親盛（如備子）は、名著『可笑記』を著した。本来貴族の行事だった人麿影供を、山形の町人が催した形跡もある。芭蕉来訪以前に、井上、富田、斎藤、松岡、豊田などという山形の住人たちが、座をつくって俳諧を楽しんでた（落合晃氏『やまがた俳諧一人案内』）。捜せば、他にも事例があるだろう。

最上時代の山形の芸術文化を、ばらばらに切り離さず、義光に代表される山形人の精神の体現として改めて見直すとき、山形の歴史はいちだんとふくよかになるに違いない。



一花堂乗阿墓碑

（光明寺歴住瑩域）

参加者の声



今と昔

加藤 匠 悟

ぼくは、先週最上義光歴史館で「うつす」をしました。なぜしたかというと、ぼくは歴史が好きで、こういうイベントが好きだからです。

最初は、「拓本」とは何か全然分かりませんでした。でも、やってみると大変面白く、なんでマスコミもとりあげなかったんだあ、と少し怒りたくなるぐらい面白かったです。あと、つめとかできずをつけ、えんぴつでこするの「乾拓」ということも知りました。



終わったあとにぼくは思いました。「写真」よりも「湿乾」は情報量が多いのに、今の人はいつもデジタルカメラのフィルムカメラだったので「写真」をとる。ぼくは、パソコンだの色々な便利なモノがあるんだけど、たまには昔のモノを使うのもいいなあ、と思います。

(山形大学附属小五年)

「はかる」の講座をうけて

伊藤 将

学校からこの講座があるというチラシをもらい、ぜひ参加してみたいと思いました。本当は、上山のいこと一緒に応募したのですが、いとこが都合がわるくなり、お父さんと二人で行くことになりました。最上義光歴史館へは、二回ほど行ったことがあるのですが、本物の鎧や刀などの重さをはかれるということですが、参加したいと思いました。実際、いろいろなものを自分の体重を基準にしてはかったのですが、「ほかい」は、

がんばって作ったミニびょうぶ

小関 杏樹

わたしは、最上義光歴史館に来たのは二回目です。一回目は四年生の社会科見学で二回目は今回のミニびょうぶ作りです。歴史好きな兄の友達が、兄をさそいました。

「杏樹も行くか？」

と、声をかけてくれました。わたしは、月曜日にスピーチの当番だった事を、思いました。

「うん、行くよー」

いいださいをもらったと思い、すぐへんじをしました。

先生の短い説明を聞いて、すぐとりかかりました。先生が簡単そうに話をするので、十分くらいで、できると思いました。一まいのびょうぶを作るのに、六まいの紙と板をつなぎあわせます。その時、紙のちようつがいを使うのですが、わたしは、そこでつまずいてしまいました。どうしてもつまがらなくて、ばらばら

思っていたより軽く、講師の人の話を聞いたら、入れ物が重いと食べ物を入れたとき運ぶのが大変だから軽いものにしたと聞き、なるほどと思いました。最後に義光の伝説の指揮棒をはかった時は、とても貴重なものと聞いて、いい思い出になりました。これから、こういう企画があったら、ぜひ参加してみたいと思いました。

(山形市立滝山小五年)



になつてしまうのです。手にのりがついてしまったり、まっすぐ切れていなかった所を発見したりして、だんだんいらいらしてきました。なげだしたくなりました。その時、母が、

「杏樹、最後まで、がんばれ！」

と、はげましてくれました。係の男の人も、手伝ってくれました。大人の人も、「むずかしいね、大変だね。」と、話していたので、自分ばかりではないんだなと、思いました。十一時半に終わる予定が、けっきょく一時に完成しました。大変だったので、ものすごくうれしかったです。

次の日学校へ作品をもつて行き、前の日のようすを話しました。先生も、みんなも、びっくりしたり、ほめてくれたりしました。がんばって、よかったなと思います。

(山形市立宮浦小四年)



平成18年度事業スナップ



斯波兼頼入部650年記念史跡めぐり
「斯波兼頼ゆかりの地を訪ねて」(中新田城跡)にて



特別記念講話「斯波兼頼と最上家の宝刀・鬼切丸」



企画展「650年前のヤマガタ」～スタートはスズカネ!!～

平成18年度事業

○企画展(3月14日～5月14日)

「よみがえる赤羽刀」～再び光り輝く郷土の刀～
展示総数14振り

ギャラリートーク 5月4日・5日
講師/布施幸一先生

○特別展(7月4日～7月30日)

「日本の美を描く・平山郁夫展」
展示総数28点(本画3点素描25点)

ギャラリートーク 7月16日
ナビゲーター/加藤千明先生

○企画展(8月3日～9月3日)

「スズカネ入部650年記念展」
展示総数24点

特別記念講話「スズカネと最上家の宝刀・鬼切丸」
講師/布施幸一先生

○史跡めぐり(10月25日)

スズカネ入部650年記念史跡めぐり
「スズカネゆかりの地を訪ねて」

最上義光歴史館↓光明寺↓岩出山城跡・有備館↓名生城址(名生館)
講師/片桐繁雄先生

○企画展(12月12日～1月28日)

「装演の美展」
展示数/軸装19幅、裂、和紙、道具など

特別講座「表具の技と美をさぐる」
会場/最上義光歴史館

1月14日「表具の技術と美演」
講師/土屋威夫先生

1月21日「表具の生い立ちと紙・裂について」
講師/小林高先生

1月28日「表具の鑑賞と取り扱いについて」
講師/伊藤光太先生

○こども講座(2月18日・25日、3月4日)

「うつつ!!はかる!!つなく!!」親子で歴史を学ぶ!!
会場/最上義光歴史館

2月18日「うつつ!!」模様をうつしてみよう!!
講師/高橋拓先生

2月25日「はかる!!」重さをはかってみよう!!
講師/揚妻昭一郎

3月4日「つなく!!」ミニ屏風をつくってみよう!!
講師/相原瑞枝

○歴史講座(2月10日・17日・24日、3月3日・10日)

「日本刀入門講座」講師/布施幸一先生・会場/最上義光歴史館

2月10日「日本刀の歴史と鑑賞1」

2月17日「日本刀の歴史と鑑賞2」

2月24日「絵画資料にみる日本刀」

3月3日「郷土の刀工」

3月10日「武将と日本刀」



特別講座「表具の技と美をさぐる」(表具の技術と実演より)



企画展「装潢[sou-kou]の美」～表具師の技と様式の美の世界～



トピックス

○新収蔵品

「最上義光等連歌巻(慶長三年卯月十九日興行賦何牆連歌 一巻)」を山形市が購入し、新たに最上義光歴史館の収蔵品に加わりました。最上義満氏(横須賀市在住)の多額の寄付によるものです。

○「指揮棒エンピツ」販売開始

小中学生を対象に実施している「最上義光クイズ」の景品として配布していた「指揮棒エンピツ」ですが、一般の方々からの強い要望により販売することになりました。頒布価格は二本で三〇〇円です。

○キャラクターシール完成

最上義光歴史館のマスケット「モガミヨシアキ」「虎将モガミヨシアキ」「まひめ」のシールシートが完成しました。こちらは、クイズの景品として配布されます。小中学生のみならず「最上義光クイズ」にぜひチャレンジしてください!!

○のれん設置

最上義光歴史館の正面玄関前のピロティに案内サインとして最上家の家紋をあしらったものとマスケット「モガミヨシアキ」の図柄の大きなのれんを設置しました。のれんを目印にぜひご来館ください。

最上義光歴史館の最新情報は公式ホームページをご覧ください。 <http://mogamiyoshiaki.jp>

名刀

「東禅寺正宗」流転

渋谷武士

前号では、「最上家浪人作のベストセラ―」と題して、寛永十九年（一六四一）に発行された『可笑記』なる仮名草子を紹介したが、この中の巻第五の二十段に、酒田生まれの著者斎藤親盛が、父親（筑後守広盛）から聞いた話として興味深い記事がある。それは、彼の母方の祖父東禅寺右馬頭勝正の武勇伝である。

天正十六年（一五八八）八月、世に言う「十五里ヶ原の戦い」が起こった。この合戦は、東禅寺氏の庄内勢を主力とする最上義光方に対して、上杉景勝の後援を受けた越後村上城主本庄繁長の庄内争奪戦であった。圧倒的優勢を誇る本庄勢によって庄内勢はまたたく間に壊滅した。右馬頭は単身繁長に迫り、真つ向から恨みの太刀を再三浴びせたものの果たせず、逆にずたずたに斬られて壮絶な討死をする。享年四十三歳であった。

この時右馬頭の佩っていた太刀が、相州正宗によって鍛えぬかれた二尺七寸（八一・八cm）の名刀である。事なきを得た繁長は、それを分捕り自分の愛

刀にした。この太刀は、その後繁長から景勝へ、さらに秀吉を経て家康に渡る。その間に刃の長さが二尺三寸（約七〇cm）ほどに摺上げられ（短くされ）、現在は紀州徳川家にあるようだ、と『可笑記』は語る。

ところが、八代將軍吉宗の時代になって、この刀は名物「本庄正宗」として登場してくる。『享保名物牒』なる名物刀剣の台帳には、刃長が二尺一寸五分半（約六五cm）、東禅寺右馬頭が本庄繁長の甲の鉢を割ったためか刃こぼれありと記されている。また、『名物牒』は移動経路についてもかなり詳しく、紀州徳川家の後は同家から四代將軍家綱へ献上されたことが分かる。

この正宗は、明治以降も徳川宗家にあって三種の神器のように大切に扱われ、昭和十四年に旧国宝に指定されたほどの名刀であったが、同二十年十二月に進駐軍によって持ち去られたまま未だに行方知れずという。

このような流転の名刀正宗を佩き、戦場に散った東禅寺右馬頭。彼が存命であったならば、おそらく最上家では屈指の人物として活躍したことであろう。また、『可笑記』の著者の胸中には、そうした人物を祖父に持つ家門の誇りを垣間見る思いがする。

平成19年度事業

【展示事業】

- (1) 企画展「鐵『Kurogane』の美2007」
山形ゆかりの刀匠たち
4月24日～6月24日
山形にゆかり刀鍛冶（室町時代から現代まで）の作品を展示紹介します。

- (2) 常設展示「季節の彩り」 6月～9月
- (3) 常設展示「武士の装い」 10月～1月

- (4) 常設展示「最上義光の手紙」 1月～3月

【普及啓発事業】

- (1) こども講座 8月（1回）
小学生を対象に、郷土の歴史に触れる機会を作り、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。
- (2) 史跡めぐり 10月（1回）
県内の最上家や郷土の歴史に関する史跡等を現地研修し、現地に赴くことにより郷土史と文化財に対する理解をさらに深める一助とします。

- (3) 歴史講座「義光博士養成講座」
7月～3月（5回）
最上義光を多角的に学習して、最上義光歴史館認定の「義光博士」を養成し、歴史館のサポーターとして活動することを目的とした組織の編成を目指します。

- (4) 歴史講座「日本刀講座」 1月～3月（5回）
日本刀の歴史や鑑賞の基礎知識、日本刀の構造や作刀の過程等を初心者にもわかりやすく解説し、日本刀の魅力を紹介します。
- (5) 『館だより』の発行 3月（年1回）
事業報告や考察、山形の歴史や最上家に関する最新の情報を広く一般に提供します。

- (6) 最上家関係資料・史跡調査事業（通年）
最上家等に関する資料・史跡等の研究調査を進め、写真撮影等による記録保存及び複写等の資料整備を行うとともに、その成果を紹介します。
- (7) インターネットによる情報の配信と企画（通年）
歴史館のホームページを活用して様々な情報を発信するとともに、ネット講座やキャラクター等の企画から物販まで幅広く展開していきます。

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。
たろこ。 (<http://mogamiyoshiaki.jp>)

【表紙の資料】

- 「右下」 紙本著色 斯波兼頼画像 山形市・光明寺
- 「中央」 紙本著色 斯波兼頼画像 山形市・光明寺
- 「左」 紙本著色 斯波兼頼画像 山形市・遍照寺

最上家の初代斯波兼頼は延文元年（一三五六）に奥州大崎（現在の宮城県加美町）から山形に入部し、翌年に山形城を築いたといわれます。二〇〇七年は山形城が築城されてから六五〇年です。

表紙に掲載された写真の資料は、平成十八年度企画展「六五〇年前のヤマガタ」のスタアは斯波兼頼!!で展示公開された斯波兼頼の肖像画です。兼頼は家督をゆづった後、城内に庵をつくり、念仏三昧（時宗）の生活をします。この肖像画は家督をゆづった後のお坊さんの姿で描かれています。制作年代はそれぞれ異なりますが、斯波兼頼の面影を伝える貴重な資料です。

【利用について】

- 開館時間 午前9時から午後4時30分
- 入館料 一般 大人300円 高校生200円
小・中学生100円（土曜日は無料）
団体（20名以上）大人240円
高校生160円 小・中学生80円
- 休館日 12月29日（国民の祝日となる場合はその翌日）
1月29日から1月31日
JR山形駅より徒歩約10分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図

最上義光歴史館

http://mogamiyoshiaki.jp

平成19年3月発行
編集発行 財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-1004
山形市大手町1-153
0231-6251-7101
0231-6251-7102
印刷 株式会社大風印刷